

# クロピドグレル錠 75mg「FFP」の 生物学的同等性に関する資料

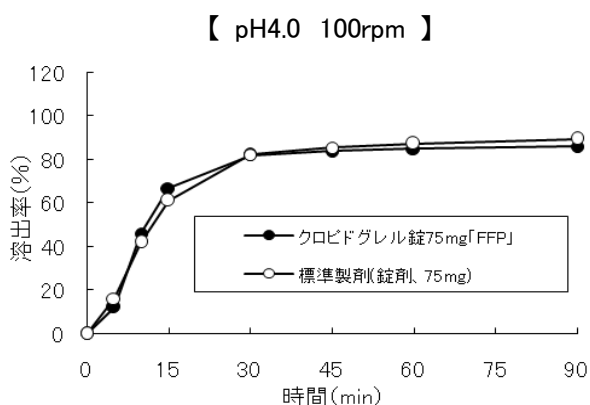
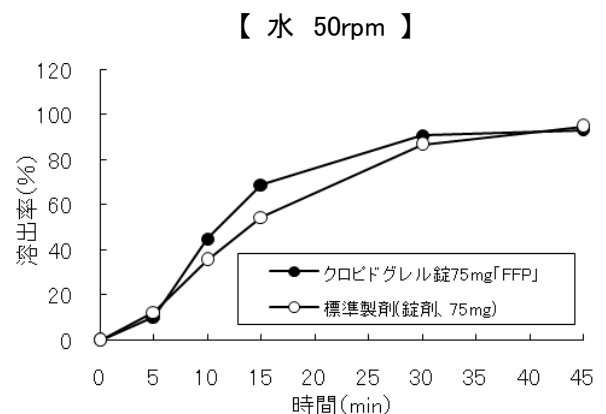
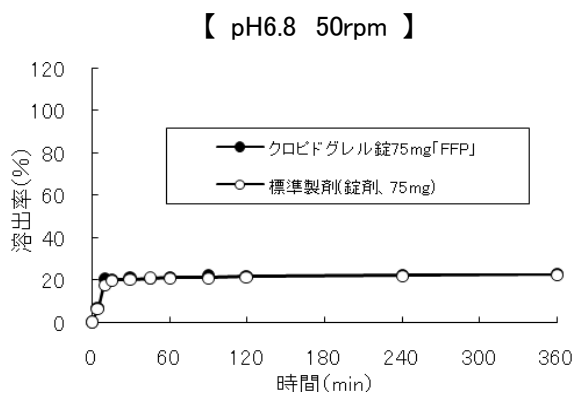
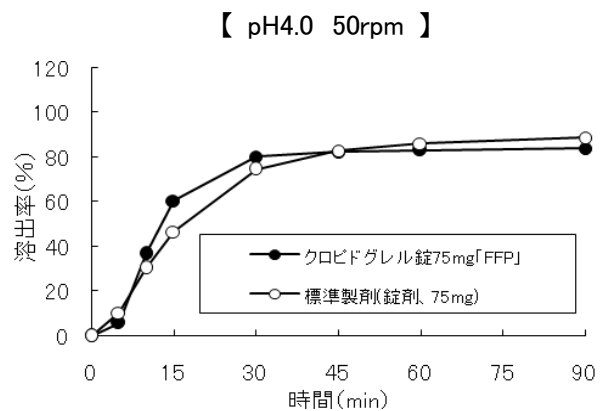
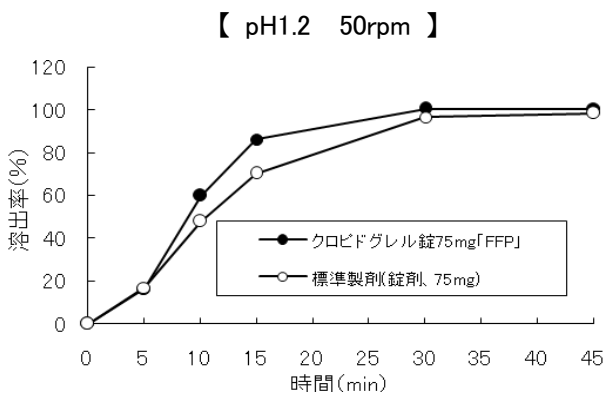
1. 溶出挙動の類似性	.....	2
2. 試験成績概要	.....	3
(1)有効性(生物学的同等性)の評価	.....	3
(2)安全性の評価	.....	4
3. まとめ	.....	5

共創未来ファーマ株式会社

# クロピドグレル錠 75mg「FFP」の生物学的同等性に関する資料

## 1. 溶出挙動の類似性

クロピドグレル 75mg 「FFP」(共創未来ファーマ)及び標準製剤(錠剤、クロピドグレルとして75mg)のヒトでの生物学的同等性試験に先立ち、溶出挙動により両製剤の類似性を推察した。その結果、「後発医薬品の生物学的同等性試験ガイドライン」(薬食審査発第0229第10号、平成24年2月29日一部改正)に従い判定するとき、いずれの場合においても溶出挙動が類似していると判定された。



回転数	試験液	平均溶出率/f2 関数	判定
50	pH1.2	f2 関数は 42 以上であった。	適
	pH4.0	試験製剤の平均溶出率は、標準製剤の平均溶出率の±15%の範囲内であった。	適
	pH6.8	試験製剤の平均溶出率は、標準製剤の平均溶出率の±9%の範囲内であった。	適
	水	試験製剤の平均溶出率は、標準製剤の平均溶出率の±15%の範囲内であった。	適
100	pH4.0	試験製剤の平均溶出率は、標準製剤の平均溶出率の±15%の範囲内であった。	適

(n=12)

## 2. 試験成績概要

### (1) 有効性（生物学的同等性）の評価

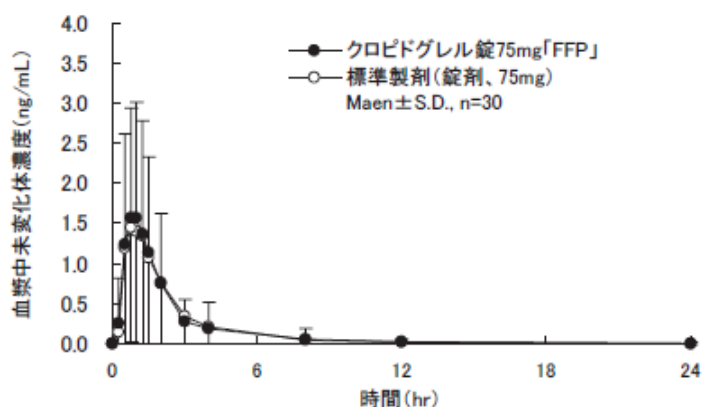
日本人健康成人男子 30 名に、クロピドグレル錠 75mg 「FFP」及び標準製剤（錠剤、75mg）を、それぞれ1錠（1錠中にクロピドグレルとして75mg（クロピドグレル硫酸塩として97.88mg））絶食時単回経口投与し、7日間以上の休薬期間をおいた2剤2期クロスオーバー法で両製剤の血漿中クロピドグレル濃度及び非活性代謝物を比較検討した。なお、本臨床試験は「後発医薬品の生物学的同等性試験ガイドライン」（薬食審査発第0229第10号、平成24年2月29日一部改正）に従って計画した。

#### 1) 血漿中クロピドグレル未変化体濃度推移

比較検討の結果、それぞれの平均血漿中濃度推移は以下に示したとおりで、クロピドグレル錠 75mg 「FFP」及び標準製剤の血漿中濃度曲線下面積  $AUC_{0-24}$  はそれぞれ  $3.64\text{ng}\cdot\text{hr/mL}$ 、 $3.55\text{ng}\cdot\text{hr/mL}$  で、平均最高血漿中濃度到達時間  $T_{\text{max}}$  はそれぞれ 0.8 時間、1.0 時間で、平均最高血漿中濃度  $C_{\text{max}}$  はそれぞれ  $1.92\text{ng/mL}$ 、 $1.94\text{ng/mL}$ 、平均消失半減期  $t_{1/2}$  はそれぞれ 2.5 時間、2.9 時間と算出された。

得られた薬物動態パラメータをもとに 90%信頼区間法にて統計解析を行った結果、0～24 時間までの血漿中濃度曲線下面積  $AUC_{0-24}$  は  $\log(0.884)\sim\log(1.126)$ 、 $C_{\text{max}}$  は  $\log(1.002)\sim\log(1.249)$  であり、後発医薬品の生物学的同等性試験ガイドラインが要求する  $\log(0.80)\sim\log(1.25)$  の範囲内であった。

#### ①血漿中クロピドグレル未変化体濃度推移



薬剤名	血漿中クロピドグレル未変化体濃度 (ng/mL)														
	時間 (hr)	0	0.25	0.5	0.75	1	1.25	1.5	2	3	4	8	12	24	
クロピドグレル錠 75mg 「FFP」		0.00	0.25	1.24	1.57	1.56	1.37	1.14	0.75	0.27	0.18	0.06	0.02	0.00	
	±S.D.	0.00	0.57	1.38	1.37	1.45	1.41	1.19	0.87	0.28	0.34	0.13	0.03	0.02	
標準製剤 (錠剤、75mg、)		0.00	0.15	1.19	1.45	1.40	1.35	1.07	0.76	0.35	0.21	0.04	0.02	0.00	
	±S.D.	0.00	0.32	1.41	1.43	1.41	1.56	1.22	1.04	0.38	0.26	0.05	0.02	0.01	

#### ②血漿中クロピドグレル濃度パラメータ

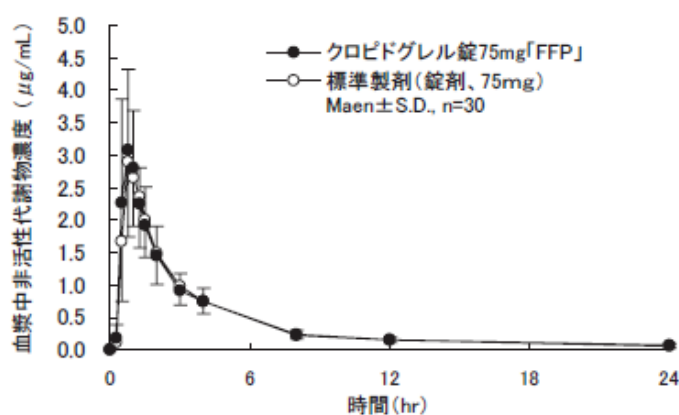
薬剤名	$AUC_{0-24}$ (ng·hr/mL)	$C_{\text{max}}$ (ng/mL)	$T_{\text{max}}$ (hr)	$t_{1/2}$ (hr)
クロピドグレル錠 75mg 「FFP」		3.64	1.92	0.8
	±S.D.	4.00	1.67	0.3
標準製剤 (錠剤、75mg、)		3.55	1.94	1.0
	±S.D.	3.35	1.84	0.4

## 2) 血漿中非活性代謝物濃度推移

比較検討の結果、それぞれの平均血漿中濃度推移は以下に示したとおりで、クロピドグレル錠 75mg 「FFP」及び標準製剤の血漿中濃度曲線下面積  $AUC_{0-24}$  はそれぞれ  $9.77 \mu\text{g} \cdot \text{hr/mL}$ 、 $9.59 \mu\text{g} \cdot \text{hr/mL}$  で平均最高血漿中濃度到達時間  $T_{\text{max}}$  はそれぞれ 0.8 時間、1.0 時間で、平均最高血漿中濃度  $C_{\text{max}}$  はそれぞれ  $3.52 \mu\text{g/mL}$ 、 $3.28 \mu\text{g/mL}$ 、平均消失半減期  $t_{1/2}$  はそれぞれ 8.9 時間、8.8 時間と算出された。

得られた薬物動態パラメータをもとに 90%信頼区間法にて統計解析を行った結果、0~24 時間までの血漿中濃度曲線下面積  $AUC_{0-24}$  は  $\log(0.995) \sim \log(1.046)$ 、 $C_{\text{max}}$  は  $\log(0.956) \sim \log(1.188)$  であり、後発医薬品の生物学的同等性試験ガイドラインが要求する  $\log(0.80) \sim \log(1.25)$  の範囲内であった。

### ①血漿中非活性代謝物濃度推移



薬剤名	時間 (hr)	血漿中非活性代謝物濃度 ( $\mu\text{g/mL}$ )													
		0	0.25	0.5	0.75	1	1.25	1.5	2	3	4	8	12	24	
クロピドグレル錠 75mg 「FFP」		0.00	0.18	2.27	3.08	2.80	2.25	1.93	1.45	0.91	0.74	0.24	0.15	0.06	
	±S.D.	0.00	0.21	1.60	1.25	0.89	0.56	0.59	0.46	0.26	0.21	0.07	0.04	0.03	
標準製剤 (錠剤、75mg、)		0.00	0.11	1.68	2.90	2.65	2.36	2.00	1.50	0.98	0.75	0.22	0.15	0.06	
	±S.D.	0.00	0.20	0.93	1.16	0.74	0.78	0.57	0.49	0.29	0.20	0.06	0.04	0.03	

### ②血漿中非活性代謝物濃度パラメータ

薬剤名	$AUC_{0-24}$ ( $\mu\text{g} \cdot \text{hr/mL}$ )	$C_{\text{max}}$ ( $\mu\text{g/mL}$ )	$T_{\text{max}}$ (hr)	$t_{1/2}$ (hr)
クロピドグレル錠 75mg 「FFP」	9.77	3.52	0.8	8.9
	±S.D. 2.22	1.05	0.3	2.7
標準製剤 (錠剤、75mg、)	9.59	3.28	1.0	8.8
	±S.D. 2.15	0.93	0.3	2.1

## (2) 安全性の評価

### 1) 有害事象

有害事象は認められなかった。

### 2) 死亡及びその他の重要な有害事象

死亡及びその他の重篤な有害事象は報告されなかった。

### 3) 安全性の結論

クロピドグレル錠 75mg 「FFP」及び標準製剤の安全性に差はなく、またその認容性も良好であると判断した。

### 3. まとめ

健康成人男子を対象として、クロピドグレル錠 75mg 「FFP」と標準製剤の生物学的同等性を検討した結果、平均値の差の90%信頼区間が、 $AUC_{0-24}$ 及び $C_{max}$ 共に同等性の判定基準内に入っており、両製剤とも安全性に特に問題はなかったので両製剤は同等の有用性が期待できるものと考えられた。